

越谷郷と足立郡

秦野 秀明

はじめに

本論では、「越谷郷」と「足立郡」に関して述べるに際し、筆者が重要と考える先行研究を以下に記載する。

①小沢 正弘（一九八九）（１）

近世以前から近世前期に至るまで、「越谷郷」が「足立郡」に属していた可能性及び「足立郡」と「騎西（埼玉）郡」の「境界」の変遷について言及した論考

②柿沼 幹夫（二〇二五）（２）

縄文時代後期から弥生時代中期後半に至るまで、現在の越谷市荻島地区に流れていた「利根川」と推定される大河南川について言及した論考

以上の①②の論考の内容を踏まえた上で、以下に②は①を補う可能性があるとする仮説を提起する。

尚、近世後期に当たる文政十三年（一八三〇）成立の『新編武蔵風土記稿』（３）に拠れば、現在の越谷市に相当する地域において、当時の「足立郡」と「埼玉郡」の境界は、「綾瀬川」の河道及び旧河道によって画されていた（４）。

同様に、当時の「越ヶ谷領」も「綾瀬川」の河道及び旧河道の「左岸側」となる「埼玉郡」に属していた（５）。

一・「越谷郷」が「足立郡」に属していた可能性について

①小沢 正弘（一九八九）（１）では、

近世以前から近世前期に至るまで、「越谷郷」が「足立郡」に属していた可能性及び「足立郡」と「騎西（埼玉）郡」の「境界」の変遷について、以下のように記載されている。

「年号は不詳であるが、戊八月二十六日付の遠山左衛門が奉じた本田殿宛の北条家印判状に

「於足立郡知行義可被下由、御約諾雖在之、越谷・舎人被下与八御留書二無之候、然者、雖両郷大郷候、重而一忠信致之付者、速可被下候云々」

という文言がある。これは足立郡において知行を下さるよしの約束があつたが、越谷・舎人を下さるとは留書に書いてはない。しかば、両郷は大郷であるが、重て一忠信の働きがあれば、速に両郷を下さるであらう云々というものである。

したがって、江戸時代騎西（埼玉郡）に入った越谷が北条氏時代足立郡の一部であつたとうけとれる文言である。そうすれば、中世においては騎西（埼玉）・足立両郡の境界が近世以後の境界である綾瀬川ではなく、綾瀬川の東部にも足立郡があり、入り組んでいたもののようにも考えられる。近世に入つて下総・武蔵の国界が古利根川から江戸川へ移っただけでなく、郡界にも変更があり、騎西（埼玉）・足立の郡界が綾瀬川に移ったとも考えられるのである」

また、近世後期に当たる文政十三年（一八三〇）成立の『新編武蔵風土記稿』（3）に拠れば、「埼玉郡」に属していた「八條領」（6）が、「足立郡」に属していた可能性について、以下のよう記載されている。

「ただ、八條領の地域を足立郡と表記した文書もみられる。先述した通り天正十九年（一五九一）十一月の見田方村浄音寺宛の徳川家康の朱印状は

「武蔵国足立郡大相模郷云々」とある。

入国直後で、地理不案内のため騎西郡とすべきところを足立郡と誤記したかとも考えられるが、近世において騎西郡（埼玉郡）とされた地域の一部が中世において足立郡の中に含まれていた可能性がないわけでもない。

なお、慶安元年（一六四八）九月十七日付の八條村西勝院や大経寺宛の徳川家光の朱印状にも

「武蔵国足立郡八條村西勝院領」とか

「武蔵国足立郡八條村大経院領」とある。

また、寛文四年（一六六四）四月五日付の忍城主阿部豊後守忠秋が八万石を宛行われた時の領地目録でも柿木・千足・別府・四条・南百。見田方・麦塚と伊原村の一部の上郷八か村は足立郡の内と記載されている」

二・縄文時代後期から弥生時代中期後半に至るまでの「利根川」の河道

②柿沼 幹夫（二〇二五）（2）では、

縄文時代後期から弥生時代中期後半に至るまで、現在の越谷市荻島地区に流れていた「利根川」と推定される大河川について、以下のように記載されている。

「縄文時代後期以降、流れを変えた利根川の新たな流路の一つとされているのが綾瀬川筋である。

〔略〕

現在の綾瀬川の東側には、かつての河道を示す自然堤防が発達しており、弥生時代中期中葉から後半（紀元前二〜紀元前一世紀頃）の集落跡が発掘調査されている〔略〕。その一つ、岩槻区の釣上高岡北（かぎあげたかおかきた）遺跡の発掘調査に際して自然堤防を形成する地盤の地形・地質学的調査がなされた（注4）（7）。その結果、旧流路跡の砂層中の炭化物の炭素14年代が縄文時代後期の年代を示し、礫種組成に安山石礫を多く含んでいた。縄文時代後期に利根川により供給されたものであり、縄文時代晩期の河道の埋積を経て、弥生時代中期中葉には安定した表土化が進んで人々が進出し、農耕生活が展開された。

綾瀬川筋の利根川上流をたどると、桶川市小針領家から元荒川筋に入り、鴻巣市箕田付近で大宮台地西縁に沿った利根川流路跡に沿って発達して妻沼低地につながる。妻沼低地は関東地方における稲作農耕開始期の中核地の一つである。熊谷市・行田市の池上（いけがみ）・小敷田（こしきだ）遺跡群、熊谷市の中中西遺跡などの農耕集落が展開しているが、釣上高岡北遺跡から検出された遺構・遺物は妻沼低地と強い関連を示していた。利根川が両地域を

結び付け、川の道を利用した相互交流が行われたのである。ただし、弥生時代後期（一世紀）になると周辺一帯から遺跡は姿を消してしまう。

「略」

また、②柿沼 幹夫（二〇二五）（2）における（注4）の出典である清水 康守ほか（二〇一八）（7）では、

「釣上高岡北遺跡の地形・地質」と題して、以下のように記載されている。

「略」縄文海進の後、ここに河川が流れ、標高1（筆者注 マイナス）6 mを超える河川の流路状の凹地が形成された。これだけ深く浸食が進むためには、浸食基準面の海水面が現在の海水準よりかなり低くなっている必要がある。日本列島の多くのところで、縄文時代後・晩期以降、寒冷化が進んでいることが知られている。これが、海水面が現在の海水準よりかなり低くなった原因であろう。また、大きく浸食しただけでなく、細礫などを含む厚い砂層を堆積したのは、流量・流速も大きな河川が考えられる。（3）で述べた利根川はこれにふさわしい河川といえる。

岩槻区南部から越谷のこの地域は利根川の流路が埋積された後、その上に粘土質シルト層が堆積し、その後安定し表土化が進んだ。ここに弥生時代中期の人が進出し、生活を展開した。弥生時代以降、利根川は北西に移動し、西側の流路跡を流下していた。この時の流路に、古墳時代以降と考えられる砂混じりの地層が堆積し、流路は埋め立てられていった」

三・「足立郡」と「埼玉郡」の祭祀圏境界

大村 進（一九七五）（8）では、「氷川神社」の祭祀圏について、以下のように記載している。

「略」西角井氏の研究によると、「略」越谷周辺では、隣接した草加市、川口市、浦和市、岩槻市に濃密な氷川社の分布がみられるが、いずれも綾瀬川の右岸を境界にしている。すなわち氷川社の祭祀圏は、西南地域の境界を示す多摩川とともに、埼玉と足立の郡界でもある綾瀬川が祭祀圏拡大の境界となったことを示している。「略」

尚、『新編武蔵風土記稿』（3）に拠れば、現在の越谷市に相当する地域において、「氷川社」の記載は「八条領千匹村」、「越ヶ谷領大澤町」の「2社」のみである（9）。

結びにかえて

以上、本論の「はじめに」に記載したように、②柿沼 幹夫（二〇二五）（2）は①小沢 正弘（一九八九）（1）を補う可能性があるとする仮説を提起する。

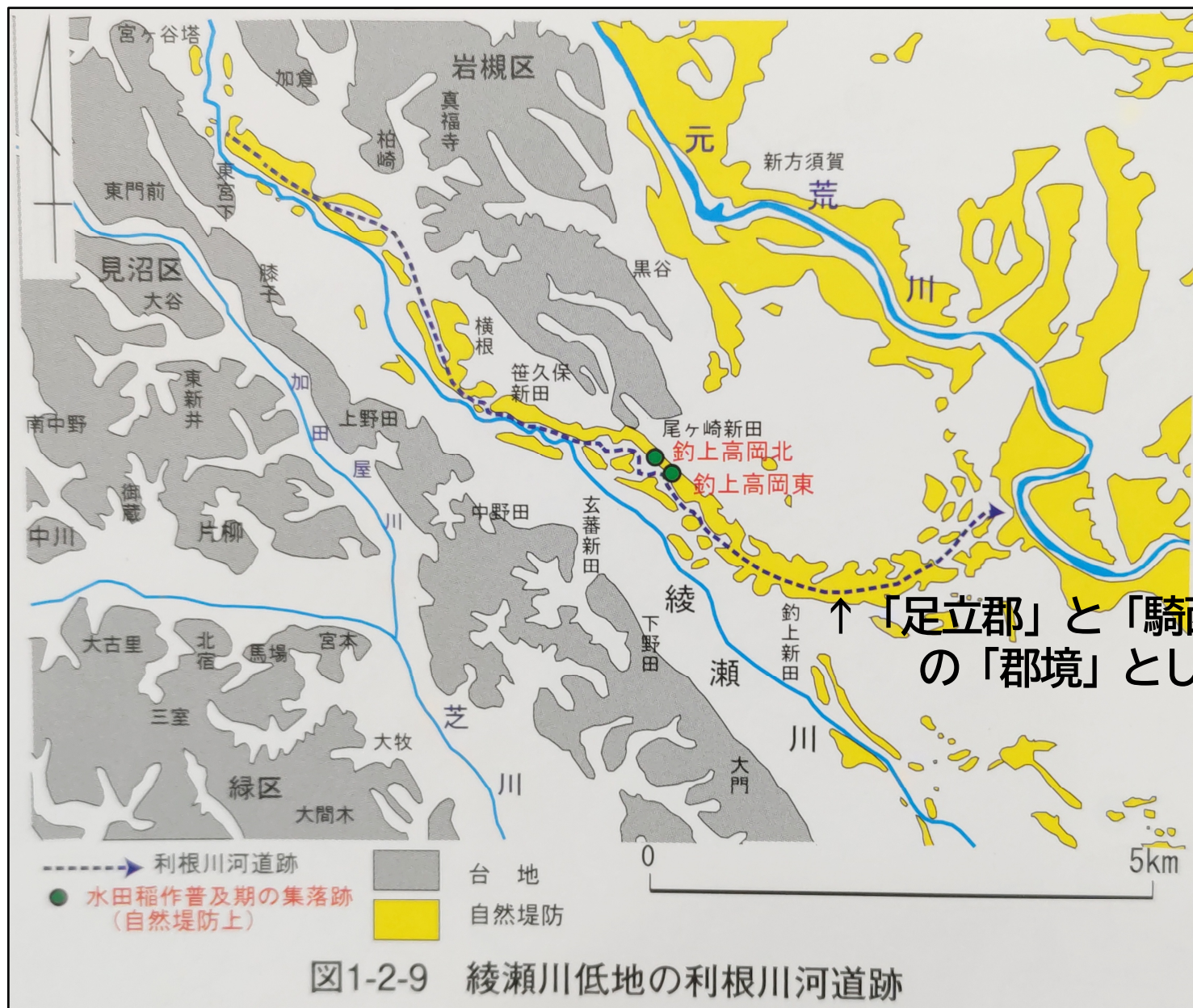
つまり、①小沢 正弘（一九八九）（1）で提起された近世以前から近世前期に至るまで、「越谷郷」が「足立郡」に属していた可能性及び「足立郡」と「騎西（埼玉）郡」の「境界」の変遷について、現在の越谷市内において「越谷郷」及び「足立郡」の「北限の境界」となる河川を、②柿沼 幹夫（二〇二五）（2）で提起された縄文時代後期から弥生時代中期後半に至るまで、現在の越谷市荻島地区に流れていた「利根川」と推定される大河川の旧河道（ま

たは後継河川としての「綾瀬川」旧河道)として推定することを、本論において筆者により新たに提起することとした。

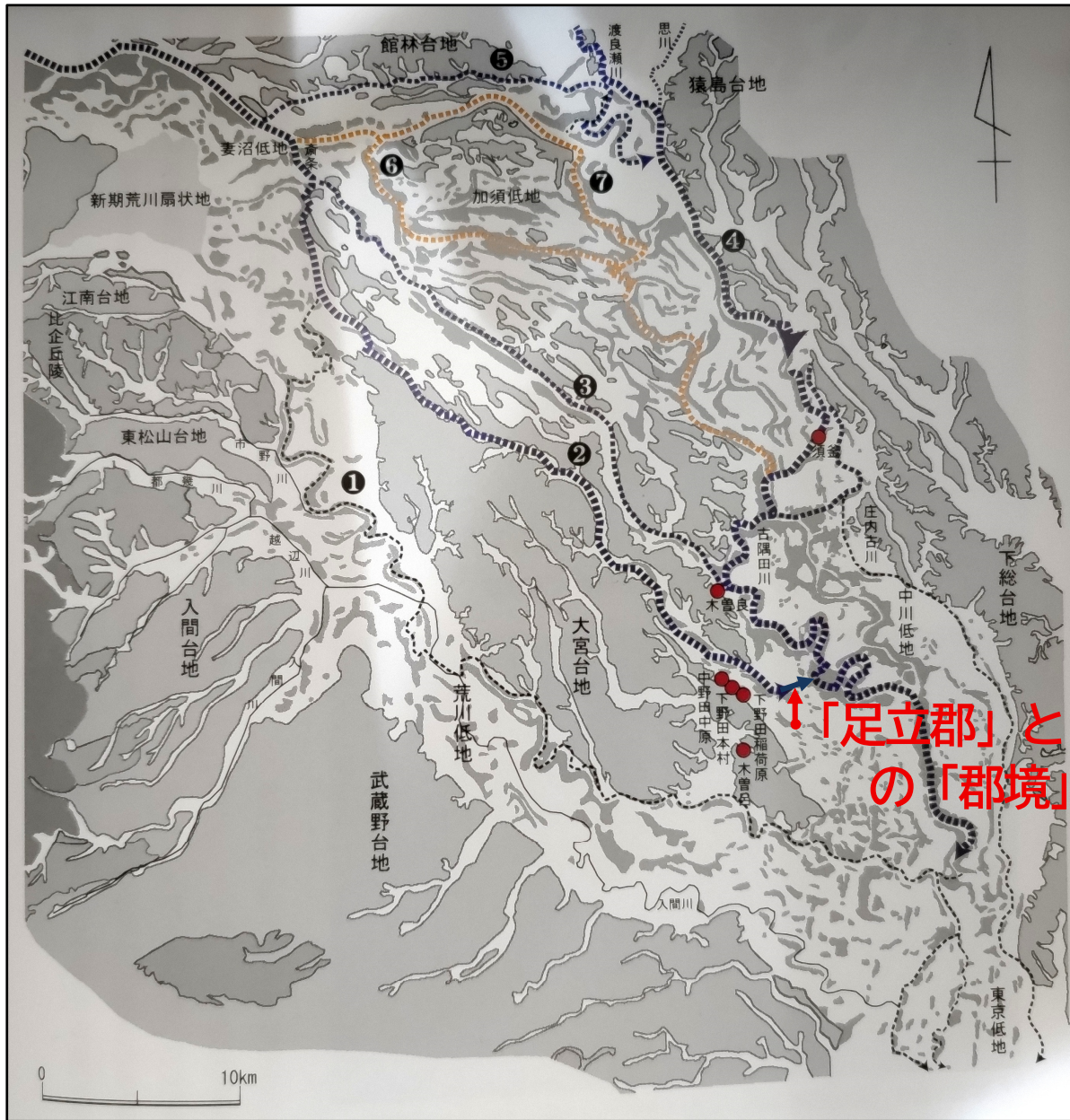
本論で引用した通り、近世以前から近世前期に至るまで、「越谷郷」が「足立郡」に属していた可能性及び「足立郡」と「騎西(埼玉)郡」の「境界」の変遷について述べるためには、さらなる調査・研究の進展が為されなければならない点は云々までもない。

注

- (1) 小沢 正弘(一九八九)
『八潮市史 通史編Ⅰ』八潮市役所 pp. 542-543
- (2) 柿沼 幹夫(二〇二五)
『弥生時代の利根川・荒川』『さいたま市史 通史編 原始・古代Ⅱ』
さいたま市 pp. 22-25
- (3) 昌平坂学問所地誌調所／編(一八三〇) 成立『新編武蔵風土記稿』
「作者」及び「成立」に関しては
「神奈川県立の図書館」
<https://www.klnet.pref.kanagawa.jp/publications/rekishi-bunken/>
「地誌#22 新編武蔵風土記稿」
<https://www.klnet.pref.kanagawa.jp/uploads/2020/12/02musashi-fudokikou.pdf>
の「解釈」を採用した。
- (4) 注(3) 卷之百九十九 埼玉郡之一「正保年中改訂図」「元禄年中改訂図」
復刻版 蘆田伊人編(一九六三)『新編武蔵風土記稿』第十卷 雄山閣 p. 80, 83
- (5) 注(3) 卷之二百三 埼玉郡之五「越ヶ谷領」注(3) pp. 147-154
- (6) 注(3) 卷之二百四・五 埼玉郡之六・七「八條領」注(3) pp. 154-176
- (7) 清水 康守ほか(二〇一八)
「第六章 釣上高岡北遺跡の地形と地質」
山田 尚友 編(二〇一八)『釣上高岡北遺跡(第1次)』
さいたま市遺跡調査会報告書第183集 pp. 49-57
- (8) 大村 進(一九七五)
『越谷市史 第一巻 通史上』越谷市役所 p. 215
- (9) 注(3) 卷之二百五・六 埼玉郡之七・八「氷川社」注(3) pp. 149, 175



出典：柿沼 幹夫(2025)「図1-2-9 綾瀬川低地の利根川河道跡」
『さいたま市史 通史編 原始・古代Ⅱ』さいたま市 p.23 より加筆して引用



利根川の河道

①妻沼低地から荒川低地
(～縄文時代後期初頭)

②元荒川～綾瀬川
(縄文時代後期～弥生時代中期頃か)

③星川～元荒川
(古墳時代後期頃か)

④渡良瀬川水系～古隅田川～元荒川～中川
(～鎌倉時代)

⑤谷田川 (渡良瀬川水系に合流)

⑥会の川～古利根川～古隅田川～元荒川～中川
(古墳時代後期～近世初頭)

⑦浅間川 (会の川に合流)

↑「足立郡」と「騎西(埼玉)郡」
の「郡境」として推定

出典：柿沼 幹夫(2025)「図 1-2-10 縄文時代後期から古墳時代の利根川と渡良瀬川水系の河道」
『さいたま市史 通史編 原始・古代Ⅱ』さいたま市 p. 24 より加筆して引用